

【主題】子どもの成長を家庭と「協力」した取り組みで「強力」サポート

【副題】参加型学年通信&生活科授業の実践を通して

【学校・団体名】 宇都宮大学共同教育学部附属小学校

【役職名・氏名】 教諭 福田 耕平

1 主題設定の理由

小学校入学にあたり、子どもたちは幼稚園と小学校の環境の変化や学習及び活動内容の違い、そして時間で区切る生活など、たくさんの戸惑いがあると考えられる。これらに関しては、スタートカリキュラム（4～7月）といった教育課程や幼児教育と小学校教育の円滑な接続を教員が意識した授業などもあり、これまでの幼児教育の経験を生かし、小学校での教科の学びに自然と生かしている姿が見られている。

一方で、学校と家庭との連携については課題が残っていると考えられる。コロナ禍で生まれた学校と家庭との分断、教員の働き方改革による業務の精選などにより、学校と家庭とがつながりを生むことが難しくなっている。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活科編（p.64）には、以下のような記載がある。

スタートカリキュラムは、小学校生活のスタートを円滑に、そして豊かにするものである。全教職員でその意義や考え方、大切にしたいことなどを共通理解し、協力体制を組んで第1学年を見守り育てるとともに、児童の実態に即して毎年見直しを行いながら改善し、次年度につないでいくことが重要である。その際、保護者にスタートカリキュラムの意義やねらいとともに、主体的に学ぶ児童の様子を伝えることは、保護者の安心感を生み出す。

上記の記述からも学校と家庭との連携は欠かせないものであることがわかる。そこで、参加型学年通信という手段を用いて、学校と家庭とのつながりを生み出すことで、保護者の安心感から学校への信頼感へとつながり、子どもの成長を一緒に支えていくものになるのではないかと考えた。

また、1年生の子どもたちにとって悩ましい問題が登下校である。送迎中心であった幼児教育とは異なり、自力での登校が求められる。本校は宇都宮市内が学区であるため、電車やバスなどの公共交通機関や徒歩通学など、多様である。教員も保護者もいない中で、いかに安全に登下校をすることができるかが課題である。この点に関しては、学校のみならず家庭でも悩ましい

問題であるだろう。これまでも本校では、学級活動の時間を利用して、交通安全教室やバスの乗り方教室なども開催してきた。しかし、直接体験を欠かすことができない1年生の発達段階を考慮すると、上記の授業の内容は理解しても、行動に移していくことがなかなか難しい状況にある。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活科編（p.29）には以下のように記載がある。

学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。

上記のように登下校の安全についてうたわれている。そこで、学校と家庭の双方で協力し、子どもたちが安全な登下校について考える場を設けることで、安全な登下校をより意識し、通学路において自分で考え判断し行動することができるのではないかと考えた。

スタートカリキュラムの時期だからこそ家庭との「協力」を大切にし、学校とのつながりを生み出すことで、子どもの成長を支える「強力」なサポーターになると考えた。保護者の安心感や学校への信頼感を生む学年通信、直接体験を大切に安全な登下校授業という2つを柱にして、以下に実践を紹介していく。

2 実践の方法

①保護者の安心感や学校への信頼感を生む学年通信

これまでの通信の多くは、学校から家庭へという発信が中心であった。今回は家庭から学校へという双方向なやり取りも大切にし、保護者参加型での発行を行った。本校ではオンライン発行の学級通信が認められており、発行については学年の裁量である。第1学年は3クラスあるため、学級通信ではクラスにより差が生まれ、逆に家庭の安心感を生み出せないと考えた。

②直接体験を大切に安全な登下校授業

生活科の授業を核として実施した。生活科の授業で欠かせないのが直接体験である。この時期の子どもは

活動や体験を好む傾向にあり、そこから気付きが生まれる。入学当初は保護者の付き添いなどもあり、いわば守られている状態での登校であった。日を追うごとに子どもたちだけでの登校となると慣れも生まれていき、一層無自覚に通学路を歩いていることが予想される。そこで、安全や危険という視点を持ち、通学路を通ったりする体験や考えたりする活動を取り入れることで、「ここには〇〇があって安全だね。」「〇〇だから危険だな。」というような通学路に関して無自覚であった気付きが自覚されていくのではないかと考えた。

3 実践の内容

①保護者の安心感や学校への信頼感を生む学年通信

○実施期間 令和6年4月～7月

○発行回数 130号

○対象 児童105名とその保護者

幼稚園と小学校の違いの1つに、保護者と教員との間の距離感が挙げられる。幼稚園では、保護者は基本的に子どもの送迎やバス通園などにより、保護者と教員が顔を合わせる頻度が大変多い。繰り返し会ったり、話したりする程、警戒心が薄れていき、親しみや親近感を覚える単純接触効果という点でいえば、幼稚園は家庭との関係性を築きやすいことが言える。一方で、小学校では、直接会って話すといった関係づくりは難しいのが現状である。保護者の来校頻度も少なく、保護者にとって学校がいわゆるブラックボックス化していることも否めない。

そこで、学年通信を有効活用した。基本的には月ごとに学年の行事予定や学習予定のお知らせを中心に掲載する学年通信だが、日刊で発行し、授業や学校生活の様子、教師の思いのみならず、学年通信にて保護者にも参加してもらおう余白を設計した。そうすることで、学校教育に対してさらなる当事者意識が生まれ、一緒に子どもの成長を支えていくという関係性が生まれるのではないかと考えた。

具体的には、Googleforms を用いて保護者に子どもの様子や通信の感想などを記入してもらった。記入の回数は自由とし、参加への抵抗感をなくすためにペンネーム制度を用いるなど、様々な配慮をしながら行った。記入の観点は以下の通りで、時期に合わせて随時追加していく形式をとった。

- (1) 小学校に入ってから見られたお子さんの成長の様子、頑張っていること
- (2) お子さんが家庭で話している学校での楽しみや

楽しかったこと

- (3) 1年生をサポートしてくれる6年生についてお子さんが話していること（6年生にフィードバックします。）
- (4) 授業参観のご感想
- (5) 通信のご感想

上記の観点にあわせて記入してもらったコメントに、教員側が返信をし、そこに活動の写真などを差し込み、1枚の通信を作成していくということを行った。(5)の観点到寄せられたコメントを基に作成した通信が下記のものである。



ご参加ありがとうございます！①

長い夏休みを前に戦々恐々とする今日この頃、夕食時に「せーの、いいね」タイムを導入しました。
 1日振り返り
 ①自分の頑張ったことや楽しかったこと
 ②家族のよかったところ
 を一人ずつ発表しては「せーの、いいね」します。親子、きょうだいでたくさん時間を共に過ごせる長期休暇ですが、その分喧嘩も増えがちなので、意識して認めあう時間を作ろう！と始めました。
 (せーのさん)

会って直接お礼したいほど、嬉しいです！驚きを越え、感動です！最近「せーの 頑張ったね！」など、バリエーションも増えてきました。また帰りの会をやっていると、時折廊下で他学年が「いいね」とやってくれます。もはや1年生＝「せーの、いいね」と言ってもいいくらい板についてきました。

家族のよいところ本当に素敵ですね！食卓が明るくなりそうな光景が目に見えます。こうして、導入したことを外に発信することで、継続しようという気持ちにもなりますよね。ありがとうございます。

他にも寄せられたコメントを一部抜粋して紹介する。

(1)について

暗唱を頑張っている娘。負けず嫌いなので、少しでも言い間違えると始めに戻って一から言い直します。いったい何度「しゃぼんだま」と言ったことか…。間違えずに言えた時の満面の笑みは、とても素敵でした。改めて、諦めない気持ちの大切さを娘から教えてもらいました。

(2)について

ついこの前まで幼稚園の送迎に付き添い、ほとんどの時間を一緒に過ごしてきました。小学生になり、1人で学校に行く。それだけでも本当に凄いことだと思い、日々成長を感じています。毎日をそわそわしながら見守っている今の日常を、なるべく忘れずに成長を見守っていききたいなと思います。

(3)について

昨日は、「帰りに6年生が校庭で遊んでくれたよ！」今日は、「帰り道、昨日遊んでくれたお姉さんが新川ま

で一緒に帰ってくれたよ。」と嬉しそうに話してきた我が子。優しく接して温かく見守ってくれる上級生に感謝します。

(4)について

教室に入った瞬間、子どもたちの可愛らしい弾ける笑顔と元気な声に私も嬉しくなりました。2回目の授業参観で子どもたちもだいぶクラスに慣れている感じが見られました。授業では、積極的に手を挙げ大きな声で発表できている姿を見て去年の今頃を思い返すと大きく成長しているのだなと感激しました。

(5)について

アンガーマネジメントの話、興味深く拝読しました。怒らないに越したことはありませんが、そうもいかず。親だって人間だもの…怒りでぶつけても本音は子どもに伝わらない。アンガーマネジメントとは少し逸れますが、つい子どもにマイナスの言葉がけをして言い過ぎたと思う事がありました。言わない言わないと思うと出来なかった時に落ち込んでしまうので、マイナスの言葉がけをしない！ではなく、プラスの言葉がけをたくさんする！に変換して、言葉がけをするようにしています。

直接保護者と会って話す時間が取れない中、学年通信といった紙面上の交流を通して、学校と家庭とで子どもの様子や子育ての難しさなどを共有していった。中には、保護者のコメントに別の保護者が共感するなど、家庭同士のつながりも生まれていった。

②直接体験を大切に安全な登下校授業

登下校については、学校と家庭とが協力体制で考えなければならない事柄である。また、子どもの安全や危険に対する気付きを促していくためには、小グループ（2～3人）での活動、他者の気付きを共有し関連付けていくためにも安全・危険箇所のタブレットでの撮影は欠かせないと考えた。そこで、グループに保護者が入り、子どもの安全確保とともに、大人やドライバー視点から見た通学路の安全や危険についても声掛けをしてもらいながら活動するようにした。

○実施期間 令和6年7月

○単元名 あんぜんの きけん！ たんけん

○単元の目標

通学路に関わる活動を通して、通学路の様子とその安全を守っているものや人々について考え、安全な歩き方や守ってくれている人やものの存在に気付き、安全な登下校をしようとする。

【単元展開及び内容（5時間扱い）】

(1)通学路で安全・危険なものって何があるかな？

導入では、校門に立つ警備員の方をクイズ形式で紹介した。すると子どもたちは「あいさつをしてくれる。」「車が来た時、声をかけてくれる。」「みんなの命を守ってくれているよ。」というような意見があがった。他にもみんなの登下校で命を守ってくれる人はいるか問いかけると「立哨当番のおうちの人もそう。」「人じゃないけど、信号や横断歩道、止まれの標識も同じ。」という意見が聞かれた。逆に危険なものはあるか問いかけると、狭い道や車がたくさん通るところという意見があがった。安全と比べると子どもたちは危険について、やや無自覚な様子が見られた。そこで、自分たちの通学路の安全や危険を探しに行くこととなった。

(2)(3)通学路の安全・危険を見に行こう！

通学路ごとに3コースに分けて活動をした。子どもたちは、前時に扱った横断歩道や標識だけでなく、壁があり見通しが悪くなるところや段差が



多くつまずくかもしれないといった危険に気付くことができた。また、白線があるとはみ出さないで歩くことができること、制限速度があると車がゆっくり走るから安全であるというような気付きも生まれた。

(4)(5)通学路の安全・危険マップを作ろう！

撮影した写真の中に安全(♡)や危険(!)のマークを挿入するよう促した。それらを学習支援アプリ上の学校周辺地図に入れて1枚のマップにまとめた。

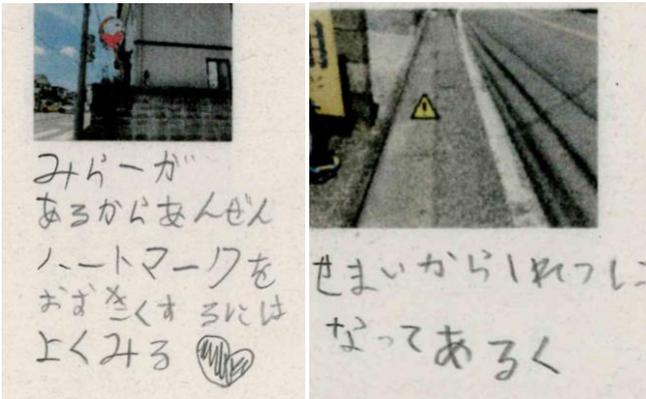


そしてまとめたものの中に、安全や危険だと思った理由を記入するよう促した。下記のワークシートのようまとめた。

話し合いの中で、ハートマークを大きくする（安全



性を高める) ためにはミラーをよく見ること、道路が狭くて危険だから一列になって歩いた方がいいというように、自分が歩く際の注意点にも気付くことができた。



4 成果と課題

①保護者の安心感や学校への信頼感を生む学年通信

【成果】

多くの保護者に賛同をいただき、通信を作成してもらった点である。総数70通のコメント、130号のうち37号もの参加型通信の作成をできたことを考えると、十分学校と家庭とのつながりを生むことができたのではないかと考える。つながりをつくり、子どもの様子や成長を共有できたことは、スタートカリキュラムにおいて、一定の保護者の安心感を得られたのではないかと感じている。「通信が毎日の楽しみの1つになっています。」「他の子の姿を見て、我が子もこのような学びをしているのだと想像しています。」「参加型通信が学校全体に広がってほしいです。」などの言葉も直接もらうことが多くなってきた。保護者の安心感が学校への信頼感にもつながり、低学年の発達段階を考慮すると、子どもの安定にも十分つながっていくのではないかと考える。

【課題】

上記の取り組みをスタートカリキュラム時のみならず継続していく点である。スタートカリキュラムは終わっても、学校と家庭とのつながりをもつことは欠か

すことができない。実際に1年生の学習内容は家庭の協力があつて成り立つものも多い。地道に継続して行うことこそが、直接的ではなく間接的ではあるものの子どもの成長につながっていくのではないかと考える。

②直接体験を大切にした安全な登下校授業

【成果】

話し合いの中で子どもたちは、横断歩道や信号、グリーンゾーンなどがあるからといって安全なわけではないということに気付いた点である。そのもの自体があるから安全なわけではなく、自分で判断し行動することができて、初めて安全になるということに気付くことができたのである。また、危険箇所も同様である。足元を時折見る必要があること、車両が多い道路は周りをよく見なければならぬこと、白線がないところこそ1列で歩くことといった危険箇所において自分がしなければならぬ具体的な行動も考えることができた。

無自覚に通っている通学路を安全や危険という視点をもち実際に歩くこと、撮影した箇所をタブレット端末上で客観的に振り返ったこと、大人やドライバーの視点から見た保護者による声かけがあつたからこそ生まれた気付きであつたのではないかと考える。

【課題】

今後も安全に登校できるようにするといった技能化が求められる。前述の通り、本校は学区が大変広いため、今回の活動範囲は限定的である。今回の学習を広範囲にするためにも、家庭の協力が不可欠だ。作成したマップを基に家庭において通学路について話し合うことを啓発するなどの手立てが必要であると考え。

5 まとめ

子どもの成長には、環境は欠かせない。その中心でもある学校と家庭とが同一歩調で歩むことこそ、子どもも困り感なく、豊かな生活を送ることができるのではないかと考える。子どもの成長を支えるために家庭との連携が必要になってくるのは、何もスタートカリキュラムの時期に限った話ではなく、参加型学年通信も生活科授業もあくまでも手段の1つに過ぎない。これからもさらに効果的な方法を模索し、子どもの成長をともに支えていきたい。

6 引用・参考資料

- ・小学校学習指導要領解説生活編 (東洋館出版社)
- ・子どもと心でつながる教師の対話力 (学陽書房 渡辺道治著)